

東京都現代俳句協会会報

発行人 山本 敏倅
発行所 東京都現代俳句協会
〒121-0813 足立区竹の塚1-28-17
今野 龍二
TEL-FAX 03-3859-9304

創立35周年記念事業の

予算を振り返って

会計部長 石垣 久良

この記念事業の準備が始まったのは、2年前に遡る。平成28年秋、記念事業の取組準備に入ることとなりました。まずは29年10月に実行委員会を立ち上げるべく素案を部長会に諮られ、翌11月の幹事会で方向性が確認された。その後、実行委員会としては都区協平成29年度定時総会に報告・提案されそれ以降の活動に委ねられることとなりました。

予算は平成29年7月の部長会にて原案を修正のうえ翌8月の幹事会で予算(案)が決定され、当初から30数万円の赤字を覚悟での船出となりました。

予算を編成するにあたっては、始めに収入

の目標を設定することが肝要で、前回30周年記念事業での経験から運営基金を多くの会員の方々からのご協力をお願いしなければなりません。

総会后、会報を発送することに振替用紙を同封することとし、会員へのご協力を仰ぐこととしました。

次に協会賞・合同句集・俳句大会と部門を大きく分けてそれぞれの応募を積極的に働きかけていただくこととし、同時に部門ごとに会計をも含めてまとめいただく取組とすることとしました。

運営基金は、定時総会以降順調に振込まれ、大会までには予定した口数を達成・突破することができました。また、協会賞作品応募を20名程度と予定しましたが27名の応募とこれも上回り、合同句集では200名予定のほぼ

近い187名の方の参加がありました。また、大会作品では600組(1200句)目標が581組(1162句)の応募となりほぼ予定に近い数字を達成する事が出来、収入の部では当初予算を上回る結果となり嬉しい出来事となりました。収支では数万円の赤字で収めることが出来ました。

都区協に限らず全国的にも会員数の減少が止まらない傾向ですが、5年前の都区協会員数は700名弱を数えていたのですが、現在の会員数は600名を割り込んでいる状況にあります。

そうした会員数の減少の中での応募等について30周年記念事業に勝るとも劣らず達成・突破出来たことは取り組んできた一人として心から喜んでおります。これもひとえに会長をはじめとして会員皆様及び役員一人ひとりのご協力の賜物と感謝を申し上げる次第です。

会員減少の一途に歯止めをかけ、一人でも多くの新会員が入会され参加していただけるような魅力ある都区協になればと。また来べき40周年記念を盛大に迎えたいものと同願いつつ報告に代えさせて頂きます。

春の吟行会報告

東京駅周辺吟行・通信句会

六月五日実施

梅雨の晴れ間の貴重な一日を多数参加頂き、
ありがとうございました。東京で暮らす皆様
にとつて、いつも通り過ぎたり待ち合せたり
と馴染はあるが俳句を詠む対象になりにくい
東京駅を中心に吟行会を催させて頂きました。
東京駅周辺の整備も進み、皇居前まで真直
ぐ延びる行幸通りを夏の風が吹き抜ける好天
に恵まれました。吟行会の当日に行けなくて
も参加出来る、というのが通信句会のいいと
ころですので、来年もぜひ奮ってご参加くだ
さい。その際、事前申込み、投句・選句の締
切をお守りいただけますよう、何卒よろしく
お願いいたします。

次回から、投句・選句の締切日に少し余裕
を持ちたいと考えております。企画部長新任
の為您心配をおかけいたしました。126
句の名句に恵まれ、盛会となりました。ご参
加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に
こころより感謝申し上げます。(以下敬称略)

東京都現代俳句協会会長

松澤 雅世 特選

蟻の列皇居の見えるところまで石口りんご
皇居は、この邦にとつて特別な存在。皇居
が視界に入るのは嬉しいものだし、清々しい
心地がする。蟻の列の、斡旋も巧みである。

現代俳句協会研修部長

宮崎 斗士 特選

皇居より生まれし風や洗い髪 杉浦 一枝
上五中七の「風」と下五「洗い髪」の配合の
爽やかさ。皇居(あるいは皇室)と作者自身
との程よく心地よい距離感が汲み取れます。

東京都現代俳句協会常任顧問

山中 正己 特選

不揃いなビル立ち上がる夏の雲 中内 火星
皇居内堀沿いを走る「内堀通り」に連なる
ビル群は世界に誇れる景観。梅雨の晴間に一
斉に立ち上がる様を描いた気持ちいい一句で
した。

東京都現代俳句協会副会長

青木 栄子 特選

夏目かな東京駅舎にある昭和 穴原 達治
東京駅と昭和の持つ様々な貌を「夏目かな」
の措辞が、読み手の思いを大きく広げてくれ

た。季語の力を感じた佳句。

東京都現代俳句協会副幹事長

栗原 節子 特選

列柱の見てきた昭和花は葉に 青木 栄子
お堀端に面した明治生命館、六月の日差
しを受けて列柱の光と影と重厚さに圧倒され
る。激動の昭和を静かに見ていた証明者でも
ある。

東京都現代俳句協会幹事長

山本 敏倅 特選

わたくしの乗り替え駅や夏の雲 青木 栄子
乗り替え駅の措辞が、わたくしと呼応し、
過去現在未来、様々な方位のどこへ向かつて
いるのか。夏雲を背景にイメージはつきない。

東京都現代俳句協会監査役

ダイゴ 鉄哉 特選

五階には五階の景色 梅雨に入る 栗田希代子
シンプルで良かった。五階から見ると梅雨の
景色は人それぞれで、幾通りの景色を見るこ
とになるだろう。正解のない所が良かった。

東京都現代俳句協会顧問

松田ひろむ 特選

東京駅発いづこへも青葉騒 松澤 雅世
東京駅周辺というのは範囲が広すぎて焦点

が絞りづらかったのではないだろうか。句は素直に鉄道に絞って「青葉騒」を発見、一句となった。

《参加作品》(高点三十句)

- 1 人呑んでビルは大きな金魚鉢 石口 榮
- 2 東京駅ハンカチにぎりしめていた 栗原かつ代
- 3 東京駅にジュラ紀があつて夏の風邪 松田ひろむ
- 4 水無月や駅に昭和の血の匂ひ 永井 良和
- 5 蟻の列皇居の見えるところまで 石口りんご
- 6 夏草の一本さへも丸の内 久下 晴美
- 7 赤帽がどこかにいるよ薄暑光 赤澤 敬子
- 8 青梅雨や乳鉄錆びゆく桜田門 高橋 透水
- 9 駅薄暑靴の中に「点と線」 次山 和子
- 10 指先のきれいな街よ夏つばめ 宮崎 斗士
- 11 天井絵の続きに皇居夏つばめ 小高 沙羅
- 12 オムライス十字の切れ目夏きざす 石川登志子
- 13 あの夏の十円切手ラブレター 相沢 幹代
- 14 更衣白の強さの女学生 菅沼 葉二
- 15 林立の立方体へ夏の雲 山本 敏倅
- 16 列柱の見てきた昭和花は葉に 青木 栄子
- 17 日の丸を振つてたくさん死にました 利光知恵子
- 18 夏日かな東京駅舎にある昭和 穴原 達治

- 19 東京駅こんな大きな空が夏 山崎 百花
 - 20 赤煉瓦駅舎の品格夏燕 近田 吉幸
 - 21 日盛りや二重橋には母がいる 鈴木 砂紅
 - 22 不揃いなビル立ち上がる夏の雲 中内 火星
 - 23 無表情の交差する駅都草 小林チエ女
 - 24 南吹く御幸通りを一直線 讚岐 幸江
 - 25 五階には五階の景色梅雨に入る 栗田希代子
 - 26 国籍のなくて展翅の蝶涼し 鈴木 光子
 - 27 皇居前平成最後の梅雨に入る 小林 和子
 - 28 東京駅発いづこへも青葉騒 松澤 雅世
 - 29 さつきまで東京駅にいた蛭 今野 龍二
 - 30 蛇衣を脱いで東京かくれんぼ 小平 湖
- (以下順不同)
- 蝸牛今も銀座に憧れて 田中 暢子
 - ひろびろと行幸通り風かをる 劔物 劔二
 - 水無月や人波煽る銀の鈴 西村 弘子
 - 中庭の裸婦にみづかき明日から梅雨 長谷川はるか
 - 亀の子や新元号を探して 磯部 薫子
 - 標本の骨格涼しミュージアム 広田 輝子
 - 平成の御代の名残りぞ風薫る 山中 正己
 - 壁のむこうは夏鰐の骨這つたまま 櫻木美保子
 - ミニチュアの東京動く夏なりき 五十嵐秀山
 - 夏空に飛ぶ将門の八重洲首 中佐 恵市

- 皇居から駅へ真直ぐ色日傘 ダイゴ鉄哉
- 響き合う松と芝生のみどりかな 菱沼多美子
- お上りさんビルを見上げる汗の顔 山口 紀子
- 皇居より生まれし風や洗ひ髪 杉浦 一枝
- 八重洲口世界の夏が交差する 鉦守 裕子
- 南北ドームに我干支捜す土用かな 田中 舞
- 新しき広場は眩し初夏の風 中本 勝美
- いくたびか東京駅の更衣 古谷あやを
- 振花のももいろ吐息皇居前 白石みずき
- 日本の臍次から次と梅雨さのこ 松本 秀紀
- 蛙跳ぶ小さき頭蓋骨をもち まるきみさ
- 万緑に溺れ赤シャツ見失う 栗原 節子
- 涼しさや旅ゆく人に手を振つて 吉田香津代
- 出勤の駅舎行き交う衣更 小湊こぎく
- ブティックの夏服戦ぐ丸の内 大橋 愛子
- 国旗一本はためくホテル梅雨の入 青島 迪
- 何年ぶり六月の中央郵便局 長尾 幸子
- 夏空を切り裂き翔ける楠公像 岡崎 久子
- 丸ビルの隙なき構え薄暑かな 加藤千恵子
- ランナーの御所を傍ら梅雨晴間 江原 玲子
- 平成の皇居ゆらゆら日の盛 宮川 夏
- 駅奥に雨後の筍ビル林立 中條 千枝
- 夏燕帰つて来れぬ帝都駅 山戸 則江

(栗原かつ代記)

Aブロック吟行会

平成三十年三月二十八日

於文京シビックセンター5階会議室

吟行地 関口芭蕉庵・細川庭園・

神田川江戸川橋の桜

絶好の吟行日和と満開の桜に恵まれて六十
一名の参加。三々五々の吟行で午後一時より
句会。今野龍二総務部長の司会、大山実知子
Aブロック長、松澤雅世都区会長の挨拶。松
田ひろむ鷗座代表の祝辞と続いた。

講話は青木栄子都区協副会長・自鳴鐘東京
支部長の「俳句雑感」。昭和二十九年から平
成九年まで続いた「女性俳句」誌の貴重な話
等を伺った。

選句の後、歛守裕子、山口紀子両氏の披露。
特別選者の講評を戴き、長谷川はるか事業部
長の成績発表、成績上位者に賞品が授与され
た。山本敏倅幹事長の閉会の挨拶でお開きと
なった。

《特別選者・特選句》

松澤 雅世 特選

花の雲人間のびたり縮んだり 大川 竜水

(敬称略)

山中 正己 特選

来し方はもう陽炎になっている 宮澤 雅子

青木 栄子 特選

君と見るさくらさくららの神田川 永野 了子

栗原 節子 特選

今年から兜太を乗せて花筏 小高 沙羅

山本 敏倅 特選

花人の羽化の始まる神田川 大川 竜水

ダイゴ鉄哉 特選

花の昼大きな犬がぬっと出て 加藤千恵子

松田ひろむ 特選

関口の桜ちらほら子だくさん 中内 火星

大山実知子 特選

蕉門を引継ぐ蛙何代目 小林チエ女

《参加作品》(高点三十句)

1 荒川線さくらへ変える膝の向き 保坂 末子

2 花人の羽化の始まる神田川 大川 竜水

3 わたくしの鍵をはずして花の昼 今野 龍二

4 来し方はもう陽炎になっている 宮澤 雅子

5 肥後椿人の匂いを消しており 江原 玲子

6 言いかけし言葉を忘る花吹雪 門野ミキ子

7 蕉門を引継ぐ蛙何代目 小林チエ女

8 花の駅すぐ俳人の貌となり 高橋 悦子

9 今年から兜太を乗せて花筏 小高 沙羅

Bブロック吟行会のご案内

日時 平成三十年十二月十四日(金)

吟行地 高輪・泉岳寺周辺

(当日は義士祭があります)

アクセス 都営浅草線泉岳寺駅下車

徒歩五分

句会場 ライフコミュニケーション西馬込

大田区西馬込二一二十一

TEL 03-3778-2581

都営浅草線西馬込駅西口下車

徒歩二分

受付 十二時半

出句締切 二階レインボーホール

開会 十三時 囀目二句

句会費 千円

講話 未定

懇親会 未定

申込締切 十二月一日

申込先 広田輝子

〒152-0033

目黒区大岡山二一七十九

TEL & FAX 03-5701-2629

10 そこだけが風の抜け道雪柳 菅沼 葉二
 11 モノクロの川へなごりの花筏 赤澤 敬子
 12 白蝶の閑節はまだ整わず 町野 敦子
 13 まっさらな空間を散る桜かな 広田 輝子
 14 満開を見届け一番桜散る 長谷川はるか
 15 神田川花の映らぬはやさかな 山口 紀子
 16 花の風園児の靴が脱げちゃった 桐山 芽ぐ
 17 轉りや母を疎みし日の遠く 秋永 悦子
 18 芭蕉庵人も桜も字余りだ 北迫 正男
 19 飛花落花いまが幸せ振り向かず 白石みずき
 20 画素粗く散りはじめたり遠桜 森山 夕香
 21 歩き歩きて春愁を解き放つ 佐々木克子
 22 桜花爛漫終末時計あと二分 神尾 久雄
 23 花盛んとんがっていた膝小僧 相沢 幹代
 24 細川庭ガラシャを偲ぶ肥後椿 小林 順子
 25 池のぞむ芭蕉の句碑や花の風 宮川 夏
 26 借景に花あるかぎり川流る 山本 敏倅
 27 紅椿水琴窟へ落ちたくて 松澤 雅世
 28 花の昼大きな犬がぬっと出て 加藤千恵子
 29 水番屋亀を鳴かせている芭蕉 鉦守 裕子
 30 花の昼ふわりと浮ぶ荒川線 岡田 淑子
 (以下順不同)
 さくら花仰げばひらり陽の欠片 鈴木 光子
 咲き満ちてさくらはさくら色徹す 栗原 節子

道なりに俳聖の跡花の中 菱沼多美子
 苗札や荷札のままにねじりどめ 中本 勝美
 春の夢永青文庫の大金庫 斎藤真理子
 花筏聖地巡礼はじまりに 松田ひろむ
 君と見るさくらさくらの神田川 永野 了子
 散る花と手つなぎ降りる胸突坂 ダイゴ鉄哉
 静かなりただ青空と花万朶 櫻木美保子
 兩岸のさくら満開くしゃみする 小湊こぎく
 点数をつけるとしたら桜満開 前田 光枝
 綿飴を繋ぎ合わせて花街道 上地 雪子
 流れゆく春昼の水の疲れかな 吉田香津代
 川音のリズム程良く花散れり 長尾 幸子
 関口の桜ちらほら子だくさん 中内 火星
 轉りの肥後まで届けたましずめ 松本 秀紀
 美しき澱みのありぬ花筏 青木 栄子
 肥後椿築山とおく侍らせて 上野 英一
 散るさくら誰か一杯くれないか 山中 正己
 花乱舞うき世の憂さを払ひけり 大山実知子
 天を突く薙刀のごと芭蕉に芽 石井 誠子
 脱ぎすてて芭蕉新芽の天を衝く 栗原かつ代
 風光るあんたがたどこさ手鞆唄 水落 蘭女
 それぞれに肥後欽仰の落椿 金子 野生
 花吹雪掴み損ねて風つかむ 讚岐 幸江
 空中に息継ぐ飛花や芭蕉庵 高橋 透水

対岸の桜をふやす日の力 瀬川 紅司
 胸突坂桜燃え出す時停まる 石垣 久良
 芭蕉庵花陰の川上りゆく 上野 貴子
 遠き日よ櫻並木の通園路 小林貴美子
 神田川水温む日や芭蕉庵 中佐 恵市
 (長谷川はるか記)

創立三十五周年記念事業基金寄付者芳名

- 三十口 富田敏子 中村和弘
- 十口 赤羽根めぐみ 五月21日に振込まれ
た方(住所氏名の記載なく不明)
- 五口 佐竹いさお 大森和子 近藤楞子
- 三三 北田はれ子 小原澄江
- 三三 内田麻衣子 馬場佳世 吉野敏子
- 二口 花田由子
- 二口 大橋愛子 五十嵐順三
- 一口 藤 三彩

(五月一日〜六月四日)

僅 残

東京都区協会
 現代俳句協会の
 35周年記念
 合同句集



定価2000円
 送料350円
 (今野龍二)

tel:03-3859-9304
 までご一報を(

Cブック吟行会

平成三十年七月六日

於 高田馬場Fービル八階
吟行地 新宿区・漱石山房記念館

あいにく朝から戻り梅雨のような雨模様にもかわからず三十四名の参加を得て、昨年オープンした漱石山房記念館の吟行句会を実施した。

同館は、漱石の文学作品を多数蔵書するとともに、様々な展示資料を掲示した常設展を初め、随時漱石そのもの、または漱石とのかかわりのある人物や文学についての企画展示会、講座などを展開している。

日本を代表する文豪の一人である漱石への関心が強く、またそれなりに句材に恵まれた。句会は高橋透水事務局長の司会で始まり、松澤雅世会長、中内火星代表の挨拶、そして山中正己先生の講話となった。

講話は漱石が生れ終焉の地となった新宿の地に因んだ話、交友関係や子規と漱石に及んだ。特に漱石の残した俳句についての鑑賞では、特別選者や参加者に意見を求めるなど、活発な議論に終始した。

選句の後、山崎百花、江原玲子両氏の披露。特別選者の講評をいただき、栗原かつ代氏の成績発表、成績上位者に賞品が授与された。鈴木光子氏の閉会の辞でお開きとなった。句会の後は懇親会。上野英一、近田吉幸両氏の進行で、終始なごやかな歓談で終えた。

《特別選者・特選句》

松澤 雅世 特選

文豪の屈託夏の雨模様

山中 正己 特選

猫塚の供華となりたる緑雨かな 青木 栄子

青木 栄子 特選

漱石を背表紙で読むレモネード ダイゴ鉄哉

栗原 節子 特選

夏が来て漱石の鬚猫のひげ 小高 沙羅

ダイゴ鉄哉 特選

夏の雨ねこの案内する漱石山房 中本 勝美

松田ひろむ 特選

則天も去私も叶はず心天 永井 良和

小高 沙羅 特選

戻り梅雨道草庵に猫時間 ダイゴ鉄哉

長谷川はるか 特選

半夏雨名前まだない猫の墓 大橋 愛子

「関東申信越・静ブック連絡会議」報告

六月三日(日) 四日(月) 群馬県渋川市伊香保にて開催。本部から中村会長はじめ四名の参加。その他各地区協から会長、事務局長が初めて一同に会して活発な討議がなされた。

東京都区協からは、松澤雅世会長と今野龍二総務部長の二名が参加した。

今回の会議は議題を会員数の減少をいかに食い止め、さらに会員増を図るには如何なる方策があるのかの一点のみの討議がなされた。

会員数は29年度末で5531名、前年同期比310名の減。平均年齢75歳と高齢化も進んで、状況は厳しくなるばかり。と言って手を拱いている訳にもいかない。

各地区からの現況報告と打開策等が紹介提案された。会員数の減少は即、会としての収入減である訳で、今迄通りの経費の使い方ではないのか。一例として機関紙月刊「現代俳句」の編集では生原稿を印刷業者に垂れ流してきたが、これをデータで流す事により年間数百万円の経費節減につながった。改善すべき点は多々。実に有意義な会議であった。

今野龍二

今野 龍二 特選

漱石の筆のあとさき花芭蕉 松澤 雅世

今村たかし 特選

漱石を背表紙で読むレモネード ダイゴ鉄哉

松田 貞男 特選

漱石に子供七人星まつり 小高 沙羅

《参加作品》(高点三十句)

1 漱石に子供七人星まつり 小高 沙羅

2 夕べから漱石のこと蚊を叩く 櫻木美保子

3 漱石を背表紙で読むレモネード ダイゴ鉄哉

4 黒猫も蜥蜴も過ぎる夏目坂 宮川 夏

5 漱石の低き文机灯の涼し 広田 輝子

6 これまでの明暗それからの七月 鎌守 裕子

7 山房に木賊つんつん言葉低く長谷川はるか

8 則天も去私も叶はず心天 永井 良和

9 木曜会の筆頭は猫夏襖 青木 栄子

10 勝手よき書斎の設い戻り梅雨 江原 玲子

11 梅雨空へ背伸びしてゐる猫の墓 今村たかし

12 文豪の屈託夏の雨模様 松田 貞男

13 飛び石の鏡子の歩幅花芭蕉 栗原かつ代

14 全集の装丁の朱や夏旺ん 大橋 愛子

15 青葉騒にんげんが人間といる 栗原 節子

16 かの猫の往来自在梅雨もまた 鈴木 光子

17 漱石の小さき文机見て涼し 山崎 百花

18 漱石の筆のあとさき花芭蕉 松澤 雅世

19 猫塚の石の傾き夏の蝶 大山実知子

20 坊ちゃんは淋しがりやの軒風鈴 水落 蘭女

21 夏草や則天去私の風が過ぐ 近田 吉幸

22 蚊遣香律儀な漱石の書斎 白石みずき

23 梅雨寒や硝子戸越しに猫の墓 上野 英一

24 猫塚の百年の石葉鶏頭 赤澤 敬子

25 木の香る漱石山房若葉雨 上野 貴子

26 猫眠る漱石山房返り梅雨 山中 正己

27 悪妻にて候もどり梅雨ねむい 佐々木克子

28 漱石山房嫉妬の夜の浮き人形 今野 龍二

29 夏の雨ねこの案内する漱石山房 中本 勝美

30 戻り梅雨漱石に学ぶころの日 長尾 幸子

(以下順不同)

花ざくる鏡子の部屋は怖ろしき 松田ひろむ

黒猫の壁に息づく夏館 中内 火星

梅雨冷や漱石を呼ぶ猫の声 高橋 透水

吾輩も版權欲しいニヤ初鯉 磯部 薫子

(高橋透水・記)

諸家

近詠

小湊こぎく(Bブロック・大田区)

会えない兄はオオムラサキの詩

恋文と怒りの葡萄書架にあり

落し穴なくてありそう枯葉踏む

近田 吉幸(Cブロック・杉並区)

A Iは神か破滅か月今宵

秋の雲ガンジー像の息遣ひ

石畳まだ濡れている萩の寺

上野 英一(Cブロック・中野区)

風の盆一瞬の風よかりけり

それぞれの花野秘めをり花野入

図書館の屋根のるごち小鳥来る

北村眞貴子(Aブロック・葛飾区)

蚯蚓鳴く上眼づかいの天邪鬼

秋白し旅の枕の広きこと

冗談を狗尾草と交わしゆく

こしのゆみこ(Dブロック・豊島区)

十五夜のやつと人肌ほどとなり

十三夜希釈しすぎてしましもう

ポケットの雲にふれつつ登高す

第十七回高田馬場夏期句会報告

平成三十年七月三日(火)

兼題「浮いてこい・浮人形」・席題「多」

今回は「浮いてこい・浮人形」でユニークな楽しい句が揃いました。一字詠み込みの「多」少し難しいかと思いましたが力作多数。

高田馬場句会に是非ご参加下さい！お待ちしております。なお参加人数は24名でした。

《高得点句》

浮き人形乾かぬうちに逢いに来て 大山実知子
 耐えること多分できないソダ水 白石みづき
 一歳のお尻追いかけて浮人形 赤澤 敬子
 浮いてこい水の地球に浮く日本 青木 栄子
 浮いてこい原潜などはもういらぬ ダイゴ鉄哉
 母は今多くを語らず合歡の花 江原 玲子
 冷奴多少のことはゆるされる 中内 火星
 緑さす真正面に多聞天 山中 正己

《参加作品》

お多福豆義理人情が邪魔をする 小高 沙羅
 あるときは日の斑と遊ぶ浮人形 広田 輝子
 門前に少し多めの水を打つ 鎌守 裕子
 梅雨明けや軽い多病を持つ歩み 棚橋 麗未
 深淵の麒麟を連れて浮いて来い 山本 敏倅

銀座駅出口多すぎ玉の汗 上野 英一

青春の危うさも又浮いて来い 宮川 夏

命名や夢かぎりなく浮人形 山口 紀子

町工場のひびきは何処へ浮いてこい 北村真貴子

山峡の宿のもてなし浮人形 近田 吉幸

指を立て水道の術浮人形 相沢 幹代

沈めるに夢中でむせる浮いて来い 中本 勝美

継母の愛疑わず浮いて来い 高橋 透水

ニユートンもアルキメデスも浮いてこい 松田ひろむ

香水の乳房幼く悔の多多 今野 龍二

皇城の多数決なら猫じゃらし 栗原かつ代

(宮川 夏記)

高田馬場句会「冬」の御案内

日時 平成三十一年一月八日(火)

午後一時より四時半

会場 千円(懇親会費三千元)

場所 JR高田馬場駅前F1ビル8階

(一階がドンキホーテのビル)

兼題 「天狼」席題は当日掲示

兼題 二句投句・互選六句

参加申込 宮川夏(定員三十五名)

TEL 080-3452-2577

Fax 03-3339-9841

編集後記

○35周年記念行事が終り、秋が来て「ポーっと生きてんじゃねーよ！」とチコちゃんに叱られないようにね。テレビと言えば、「プレバト」が私のまわりで人気。なぜか俳句をしてないまわりの人。「むつかしいことをされているんですね」などと。ますます私の俳句は見せられぬ。○火星大接近ということで行く先々の句会で、「火星」の文字が踊っていた。大接近と言えど地球との距離は約五七〇〇万キロメートル。距離には諸説？あるようだが、反対に一番遠い時は三億キロを超える。遙か遠い星である。○「諸家近詠」を久々に再開。まだこの欄に一度も投句されていない方は是非会報編集室まで。○十二月にBブロックが二度目の吟行会を催すことになった。各ブロックは年に一度と決めつけず、二度やるもよし、一泊かけてやるもよし、いろいろなアイデアを期待する。

(中内火星記)

広報部・編集室

〒150-0013 渋谷区恵比寿

〒150-0013 中内火星方

tel&fax 03-3344-0147

Eメール ham@mx3.ttcn.ne.jp